

仙台文学館ニュース

Sendai Literature Museum News



一番町の金港堂



常盤新平
『そうではあるけれど、上を向いて』所収
(1989年 講談社)

高校生のころ、学校の帰りは遠まわりして、かならず本屋に寄った。はるかな昔、昭和二十二、三年のころである。私は仙台に住んでいて、家から学校までは歩いて四十分の距離だった。(中略)

帰りは東一番町をまわって帰るのだから、よけい時間がなかった。そのころ、藤崎という百貨店の近くに高山書店があって、私は毎日のぞいてみたものである。いつも同じ本が並んでいたように思う。本のない時代で、新刊が極端に少なかったが、丸山薫の『花の芯』という詩集を一冊買った記憶がある。(中略)

仙台にいたころは、丸善にもたびたび行った。当時の丸善は国分町にあって、バラックだった。敗戦の翌年の一月だったか二月だったか、丸善で私は生れてはじめて英文の雑誌を買った。『ライフ』である。(中略)

受験勉強が忙しくなると、東一番町をまわって帰宅することもなくなったが、それでも、本屋はつねに楽しかった。休みの日に高山書店や金港堂に行ったりした。(中略)

あのころ、買った本は全部読めると信じていた。時間は無限と思われるほどにあったし、何時間読みつづけても、目が疲れるということがなかった。

(常盤新平「仙台の本屋」)

あのころ

文学のある風景

小池 光の 気になる日本語

21

ぶらぶら

斎藤茂吉の晩年の歌に、

ぶらぶらになるときありてわが
孫の斎藤茂吉一路上をあるく

という一首があつて、名歌、秀歌の類ではないけれど、妙におもしろいので、知っている人は知っている。歩きはじめたらしいの孫の茂一が路上を歩いていて、ときに「ぶらぶら」なることがあるというのだ。だが、ここが一首の眼目という一首のすべてというユニークなところであるが、よくわからないといえはわからない。

でもなんとなくわかるといえばわかつて、幼児の動作が目につくかんたりにする。茂吉の言語感覚の鋭敏さを垣間見る思いがする。

この「ぶらぶら」みたいなことをばを擬態語といって擬音語と合わせて「オノマトペ」という。日本語には実にたくさんある。オノマトペがあり、われわれは特に日常会話において誤りなくしきりにこれを用いて会話している。オノマトペがなくなると、直接性を失い、メンドクさいものになってしまうだろう。オノマトペだけを集めた分厚い辞書もいくつも出ている。手元の

辞書(『日本語オノマトペ辞典』小学館)で「ぶらぶら」を引くと「宙に釣り下がったまま、軽くゆれ動くさま」と出ている。あるいは「何の主体性もなく流されるままに過ごすさま」などと出ている。茂吉の歌の「ぶらぶら」はそのどちらでもなく、小さな子どもの体の動きを独自に捉えた感じがして、そこがあたりらしい。

「ぶらぶら」のトナリには「ふらふら」「ぶらぶら」というオノマトペがある。「ぶらぶら」と合わせて三語を並べてみると全然意味が違うのに改めて気が付いて、へえーと思ったりする。「ふらふら」なら急に立ち上がったふらふらになつた、みだりに用い、「ぶらぶら」なら一番町をぶらぶら歩いた、みたいに用いる。われわれはその差異を完璧に知っている、誤りなく用いて日々会話しているのだからすごいといえはすごい。

オノマトペはたいてい二音の繰り返しだ。そこに一語の助詞がついて「ぶらぶらに」のように五音化する。すなわち短歌の五七五七七の五が生ずる。短歌を作っていると否応無しにオノマトペに敏感になり、茂吉の前掲の歌のようなものがひょっこりできたりする。おもしろいことである。

学芸室日記

○ひざしの杜

もう少しで開店一周年を迎える「ひざしの杜」。初春メニューとして、この時期旬の「せり」を使った「せり鍋風仙台雑煮&ミニちらし」、企画展開連メニューとして「ひょっこりソパッフル」(「ドラマ・ウィズ・ミュージック 井上ひさしの音楽世界」)、「ほっこりおしるこセット」(100万人の年賀状展)をご提供。季節や展示にあわせて、スタッフの方々がメニューを考案しています。米館のほかに、またちょっと一息つきたい時などに、どうぞお立ち寄り下さい。



○友の会文学散歩

仙台文学館友の会では、毎年、友の会会員限定の文学散歩を実施しています。11月28日には、前号の文学のある風景で紹介したスズキヘキを取り上げ、「スズキヘキの原風景・北目町界隈を歩く」の文学散歩を開催しました。会員20人が、スズキヘキのご長男・鈴木樹吉さんに解説をしていただきながら、旧居跡や作品に描かれた場所を廻りました。また昼食時にはヘキ作品の「カミフーセン」「アメフリアサガオ」を樹吉さんが歌ってくださる一幕



も。ヘキの魂が天上からおりてきて、まるで一緒にいるかのような、濃密なひとときを味わいました。

○文学とアートのコラボレーション

12月には、地下鉄東西線「国際センター駅」に、「せんだいアートノードプロジェクト」活動の一環で、郷土研究家の天江富弥とスズキヘキを中心にすえた「アッパトッペ=オガル カタカナシ記念公園」が出現しました。ゆかりの店「炬燵」をモチーフにしたスペースに、二人のこけし人形が



鎮座。ヘキのカタカナ詩にちなみ、カタカナのオブジェに囲まれた遊びの空間が展開しました。当館単独では決して実現しなかったこの企画。まさに文学とアートが融合した、とても不思議な世界が広がっていました。

○おめでとうございます

1月19日、恩田陸さんが第156回の直木賞を受賞されました。受賞を記念して著作をご覧いただける、特集コーナーを設けました。常設展示室では、恩田さんの作品をご紹介します。直筆の原稿もご覧いただけます。「歌を歌い、本を読んだ中学時代」を過ごされた仙台。東日本大震災の折には励ましのこともお寄せいただきました。ますますのご活躍をお祈り申し上げます。

『神秘日本』

ときに、一冊の本との出会い
は、不思議に満ちたできごとで
ある。

たとえば、わたしにとっては、
岡本太郎の『神秘日本』などは
そうした不思議な出会いをした
本のひとつである。この人にな



いする興味はかけらもなかった。
あの、眼をむいて、「芸術は爆発
だ!」と叫んでいる晩年の太郎
の姿には、むしろ嫌悪感をいだ
いていたかもしれない。会った
ことはない。あくまで遠い人だ。
そのままずれ違ふはずだった。

太郎は一九九六年に亡くなっ
ている。その頃、太郎の本はほ
とんどが品切れ・絶版であった。
忘れられた過去の人だったの
だ。東北学という知の運動にと
りかかっていた。舞踏家の森繁
哉さんから、あるとき、「岡本太
郎の東北論がもしろいよ」と
教えられた。太郎の「オシラの
魂」という紀行文のコピーを手
渡された。しかし、わたしはそ
れを読むことなく、どこかに打
ち棄ててしまった。とことん関
心がなかった。

いつ、どこでのことなのか、よ
く思い出せない。あるとき、な
にか立食パーティの雑踏のなか
で、ワイングラスを片手に、ひと
りの女性がふらふらと近づいて
きた。いきなり、あなたの東北
ね、わるくないけど、なんだか口
ごもってばかりで、もっとはつき
り言いなさいよ、といった言葉の
かけらを、こちらの顔に吹きか
けるように投げつけて、それな
りどこかへ行ってしまった。な
かば突然としながら、かたわら
の人にたずねた。岡本太郎さん

のパートナーの敏子さんよ、と
教えてくれた。
それから、なぜか、この人とは
すれ違ふことが多くなった。会
うたびに、太郎さんはほんとに
カッコよかったのよと、のろけ話
を聞かされた。ついでに、あな
たももう少ししゃきつとしなさ
いよ、とツブテを投げるのを忘
れなかった。たぶん、その頃、太
郎が鹿踊りやナマハゲや恐山の
写真を残していたことを、はじ
めて知ったはずだ。心に刺さる
写真だった。

わたしはようやく、「オシラの
魂」を読んだ。恐山の夏の大祭
を訪ね、太郎と敏子はイタコの
口寄せや、数も知れぬ婆たちの
真夜中の盆踊りに遭遇したの
である。一九六〇年代はじめて
の紀行であった。さらに、「日本再
発見」に収められた秋田や岩手
の紀行を読んだ。衝撃だった。
わたしが手探りに、東北学の名
のもとに思い描こうとしていた
東北の文化的な原像らしきも
のが、三、四十年前も前に太郎に
よって提示されていたのである。



『神秘日本』岡本太郎
(1964年 中央公論社)

敏子さんはそのことに、いつま
でも気づかぬわたしに苛立つて
いたのではなかったか。

あなたのやってみることね、そ
れ、太郎さんがずっとむかしに、
もつと鮮やかにやっていたわよ、
そう言いたかったのだろうが、
けつして、それを口にするこ
とはなかった。わたしがみずから
気づく瞬間を、会うたびに挑発
しながら、辛抱づよく待って
てくれたのである。だから、わ
たしがそれを伝えると、敏子さ
んは目元をくしゃくしゃにして、
やっと気がついたのねと、しか
し、やはり言葉にすることなく
うなずいた。そうして、わたし
は太郎と敏子の同志となった。
それから、『岡本太郎の見た
日本』を書き下ろすまでには、
何年かの歳月が必要だった。わ
たしはこの本を、敏子さんのた
めに書いた。それはきつと、ひ
とつの恋だった。わたしは恋文
のように、それを書いた。太郎
さんとわたし自身の境目を、わ
ざとあいまいにして溶けあうよ
うな文体を選んだ。だって、太

赤坂憲雄さんと仙台文学館

2004年6月26日

対談「賢治と東北」

開館五周年記念特別展「宮澤賢治展 in センター〜永久の未
完成」の関連イベントにご出演くださいました。「雨ニモマケズ」とい
う詩によって広まった聖人君子としての宮沢賢治像に対し異を唱
え、賢治作品が内包する「グロテスクな笑いや道化ぶり」や「ひそかに
埋め込んでおいた思想」が、これまで読み解かれてきたのだろうか
と疑問を投げかけました。

2016年1月16日

赤坂憲雄トーク

「地域から本を作る『東北学』の挑戦」

企画展「人と街をつなぐ〜みやぎで生まれた本・雑誌」の関連イ
ベントで、『東北学』や『別冊東北学』を立ち上げた赤坂さんに、創刊
の思い出や取り組みについてお話しいただきました。東北ならではの
視点から編集された『別冊東北学』。次第に「のれん分け」をし、「津
軽学」「盛岡学」「仙台学」「やまがた村山学」「会津学」と、顔が見え
る関係での雑誌作りに移行。「石
巻学」(2015年12月創刊)は、震
災後、自分たちの街をどう記録し
ていくか、一つの答を示せたの
ではないかと、荒根恵子の土方正志
さん、プレスアートの川元茂さん
とともに、「地元学」の持つ意義を再
認識されていました。



2016年11月4日

ライブ文学館 Vol.17

「方言を味わう、方言から考える〜『吉里吉里人』の世界」

井上ひさし『吉里吉里人』を朗読で味わった後、小森陽一さんと
対談いただきました。3.11以降、「ことばが粗くなった」と憂う赤坂さ
んは、「今、改めて文学のことは、文学の力を信じ直したい」と思った
とのこと。第一部のウィリーささき。さんによる、渾身の朗読を「こ
とばが身体性を持ち、生き物のようにさわれる感じがした」と絶賛。村
に語り継がれてきた伝承、歴史などについて熟知して書かれている
『吉里吉里人』は、作り物でもなく、フィクションでもなく、これ自体が
生き物であるとしめくりました。



郎と敏子への恋文なんだから、
そんな乱暴なことも許されるは
ずだと信じて。
そして、じつは、『岡本太郎の
見た日本』がようやく刊行され
たときには、敏子さんもまた、こ
の世の人ではなかったのだ。「い
よいよ岡本太郎論にとりかかる
から、楽しみに待っててね」と伝
えた、その深夜の電話が、敏子
さんの声を聞いた最後になって
しまった。亡くなる二カ月ほど
前のことだ。だれよりも読んで
もらいたかった、喜んでもらいた
かった、その人がすでにこの世に
おさらばしている。それはかぎ
りなく残酷なことだ。

例えば、一冊の本との出会い
など、いつだって偶然の所産な
のではないか。わたしはほとん
ど病的な本の買い方をしてきた
から、さだかな冊数もわからな
いが、何万冊かの蔵書をもっ
ている。いまは何か所かに分散し
ていて、全貌は知りようがない。
そのうち地下の書庫にまとめ
て取められることになっている。
わたしは死ぬまでに、その内の
どれほどを読めるのだろうか。
おそらく一パーセントにも満た
ないにちがいない。大半の本と
は出会わずに終わる。
そんなことを考えていると、
太郎の『神秘日本』との出会い



がかけがえのない僥倖に思われ
てくる。あのとき、敏子さんは
わたしに、太郎さんからのメッ
セージを伝えるためにやって来
たのではなかったか。そう、い
まに思う。四十代の太郎さ
んが残した、日本文化の掘り起

こしのための紀行の書の群れを
再発見せよ、と。まるで、何か
雑誌の岡本太郎特集の書き手
のひとりのように選ばれたのだ。
敏子さんはきわめて有能な編集
の人であった。愛の痛みを知る
人でもあった。

赤坂憲雄(あかさか のりお)

1953年、東京生まれ。東京大学文学部卒業。民俗
学者、学習院大学教授。福島県立博物館館長、遠
野文化研究センター所長。1999年『東北学』を創
刊。『岡本太郎の見た日本』によりドゥマゴ文学賞
と芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。民俗学をベース
に東北の文化や歴史を掘り起こす『東北学』の活動に
より河北文化賞を受賞。著書に『東北学/忘れられ
た東北』『東西/南北考』『3.11から考える「この国
のかたち」東北学を再建する』『ゴジラとナウシカ 海の
彼方より訪れしものたち』『増補版 遠野/物語考』
『福島へ/福島から 福島民報(日曜論壇)2004
〜2013 赤坂憲雄エッセイ集』ほか多数。



展示構成

Chapter 1 ぼくの仕事

装丁・装画、小説、エッセイ、絵本、漫画、雑誌、広告、立体物など多様な仕事を、資料を交えて紹介します。

Chapter 2 ぼくと3人の作家

「安西水丸」が生まれるきっかけとなった、嵐山光三郎。互いのことを「兄弟のようだ」と語る、村上春樹。高校時代からの「憧れの存在」、和田誠。三氏との交流の中で生まれた作品たちに焦点をあてます。

Chapter 3 ぼくの来た道

小学生の時に描いた絵や、学生時代の卒業制作作品、駆け出しのデザイナー時代の広告作品などの貴重な資料を交え、幼少期に絵を描く楽しみを覚えた千倉から、イラストレーターとしてアトリエを構える青山まで、歩んできた道を辿ります。

Chapter 4 ぼくのイラストレーション

安西水丸が描いた原画や、本展のために復刻制作されたシルクスクリーンなどを展示します。



村上春樹氏との共著
『象工場のハッピーエンド』より
CBS・ソニー出版 1983



和田誠氏との二人展 AD-LIB 展1より『アドリブ』2008



Photo by Nakano Masataka

安西水丸

東京生まれ。日本大学芸術学部美術学科造形コース卒業。電通、ADAC(ニューヨークのデザインスタジオ)、平凡社でアートディレクターを務めた後、フリーのイラストレーターになる。1985年準朝日広告賞、1987年日本グラフィック展年間作家優秀賞、1988年キネマ旬報読者賞など受賞多数。小説『アマリス』、『荒れた海辺』、エッセイ『青山の青空』、『スケッチブックの一人旅』、絵本『がたんごとんがたんごとん』、『ピッキーとポッキー』など著書多数。

装丁を手がけた書籍



江國香織『すいかの匂い』
新潮社 1998



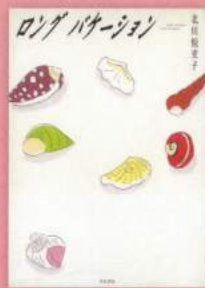
安西水丸『バードの妹』
平凡社 1998



安西水丸『荒れた海辺』
新潮社 1993



安西水丸『アマリス』
新潮社 1989



北川悦史子『ロング・バケーション』
角川書店 1996



阿刀田高『猫を数えて』
講談社 1990



『カレーを食べに行こう』
平凡社 1998



花登匡『私の裏切り裏切られ史』
朝日新聞社 1983



松本直也『新日本漫遊記』
CBS・ソニー出版 1984



村上春樹『中国行きのスロウ・ポート』
中央公論社 1983

関連イベント

関係者による対談や講演会などを予定しています。詳細は、本展チラシやホームページでご確認下さい。



the work of
illustrator
ANZAI MIZUMARU
exhibition

展

安西水丸

イラストレーター



安西水丸は、1970年代より長年にわたり多方面で活躍したイラストレーターです。漫画、絵本、小説やエッセイの執筆、翻訳など、枠にとらわれることのない多様な活動をしながらも、心には「イラストレーターであることへの誇り」を常に持ち続けていました。彼の作品は画面の要素をできる限り削ぎ落としながらも、柔らかなユーモアに溢れ、ときに優しく、ときに鋭く、みる者を魅了しました。

本展覧会では「小さい頃よりずっと絵を描くことが好きだった」と語る安西の幼少期から晩年に至るまでの足跡を、イラストレーションの作品を軸に辿ります。また、公私にわたり親しい間柄だった嵐山光三郎、村上春樹、和田誠、三氏の仕事も紹介いたします。ひとつの時代を風のように駆け抜けた安西水丸の作品展を是非ご覧ください。



せんだい文学マップ

前号でお伝えしていた、「せんだい文学マップ」がリニューアルしました。仙台市内の歌碑や詩碑などの文学碑、関連施設を三十以上ご紹介しています。写真は本ニュースの巻頭コーナー「文学のある風景」を手がけてくださっている、写真家の佐々木隆二氏による新撮で、碑の現在の様子を知ることができます。また当館にある「扇畑忠雄歌碑」「海鋒義美音楽碑」「エドモンド・ブランドン詩碑」や、文学館施設の情報も掲載しています。本マップは、当

お知らせ せんだい文学 マップ完成!

館情報コーナーで希望者の方にお渡ししています。ホームページでもご覧いただけますので、気になるページを選んでご利用いただけます。
<http://www.sendai-lit.jp/>
表紙デザインも新しくなった「せんだい文学マップ」を手には、ゆかりの地をめぐってみてはいかがでしょうか。

お知らせ 展示室劇場の 挑戦

これまでに、夏目漱石や正岡子規、北杜夫、井上ひさしなどの展示の際に、展示室内で作品を味わっていただく「展示室劇場(リーディング)」を行ってきました。在仙で活躍中の役者さんによるリーディングは、作品世界へ誘うイベントとして、毎回好評を得ていましたが、この度、この手法をより押し進めて、常設展示で取り上げている、島崎藤村、土井晩翠を主人公にした文学と演劇のコラボレーション「展示室劇場」に挑戦します。十五分ほどの時間に、二人の生涯や仙台とのゆかり、そして作品世界を盛り込んだ寸劇を、資料に囲まれた空間で観劇していただきます。脚本・演出は、映像作家のクマガイコウキさん。初回は、このニュースがお手元に届く頃に終了しています

昨年の七月、宮城県岩出山の資料収集家・増井三夫さん(故人)が長年集められた宮城ゆかりの文学者の資料をご寄贈いただきました。増井さんには、二〇〇一年の企画展「佐左木俊郎展」(岩出山出身の作家・編集者)を開催の折、貴重な初版本をご寄贈いただいたご縁がありました。この度の寄贈資料

お知らせ 宮城ゆかりの 文学資料の ご寄贈

が、今後定期的に開催する予定です。日程が決まり次第、ホームページや市政だよりなどでご案内します。どうぞお楽しみに。



常設展示室が舞台になります

は、佐左木俊郎はじめ、歌人の原阿佐緒、作家の大池唯雄、詩人の白鳥省吾、俳人の遠藤梧逸など、宮城ゆかりの様々な文学者の著作や原稿、短冊、書簡など多岐にわたります。ご息女・増井ひろ子さんによると、増井さんは、郷土ゆかりの文学者の資料を収集することが大変お好きで、ご家族があきれるくらいの熱の入れようだったとのこと。今回の寄贈を父も喜んでいました。資料は全集などに未収録のものも多く、今後調査をすすめ、ご紹介の機会をつくりたいと思います。



佐左木俊郎原稿「南瓜泥棒」農民文学を牽引し、昭和初期に活躍。増井氏が特に力を入れて収集していた作家。

原阿佐緒歌稿
「風靡る夜」(左) 原稿「菜葉の美」(右)
大和町出身の歌人。大正時代に活躍するも、恋愛スキャンダルにより歌壇から追放される。現在生家が記念館となっている。

白鳥省吾色紙
築館出身の詩人。

今年で十八回目となる、夏休み子ども文学館えほんのひろば。毎年、多くの親子の方々に、絵本や物語の世界を楽しんでいただいています。今年は、「でんしゃにのって」や「ももんちゃんシリーズ」でおなじみの、とよたかずひさんの絵本世界をご紹介します。二〇〇〇年にスタートしたこの「子ども文学館えほんのひろば」。その記念すべき第一回でご登場いただいたのが、とよたさんでした。あれから十七年、その間に力持ちでかわいい「ももんちゃん」や「しんぱいごむよう」のゆかいな決めゼリフの「おいしいももんちゃんシリーズ」など、新しい作品がたくさん生み出されました。今回の展示では、「でんしゃにのってシリーズ」「ももんちゃんシリーズ」「おいしいももんちゃんシリーズ」「ぼかばかおふろシリーズ」の四シリーズをご紹介します。会期中はとよたさんによる、読み聞かせ会やサイン会、ワークショップなどを企画中です。どうぞお楽しみに! 詳細は、初夏頃に配布予定のチラシや、当館ホームページでご確認下さい。

とよたさんから



とよたかずひさん

お知らせ 子ども文学館 「とよたかずひこの 絵本世界」



お知らせ ブックガイド 作成中

夏休み企画のもう一つの人気はお話会。二〇〇〇年の第一回目から、多くの団体にご参加いただき、現在は三十を超える団体の方々が、来館する子どもたちのために、絵本の読み聞かせや素話なし、紙芝居、手あそび、影絵、人形劇：様々な演出を行ってくださっています。そんな団体のみなさまにご協



お話会の様子



紹介された絵本

力いただき、現在「せんだい文学館ブックガイド(仮称)」を編集中です。これは、子どもと一緒に楽しむおすすめ本、いつか読んでほしい本・手渡したい本、子どもをめぐめる様々なことに疲れたときのおすすめ本、といったテーマで、みなさんお気に入りの本をご紹介します。また、当館のゼミナールや展示・イベントなどでお世話になっている、清水真砂子さん(児童文学評論家・翻訳家)、とよたかずひさん(絵本作家)、宮川健郎さん(児童文学研究者)にも、文章をお寄せいただきました。当館職員のおすすめや思い出の本も掲載。皆さんがよく知る本、初めて知る本、様々な本との出会いがきっとあるはずです。